

よし はら いち こん えん だん
『吉原一言艶談』

—翻刻付解題—

本書は、柳亭種彦『吉原書籍目録』によると、次のようにある。

吉原一言艶談 半紙本

半紙本一二三四を見る。一冊闕て五冊なるべし、画風を考ふるに、宝永年間の印本と覚し、名はあからさまに記さねども、紀文が扇流し、節分の豆撒きの事などありて、作振り頗るをかし、此冊子、故朝寝坊夢羅久蔵書、類本未見、紀文現在の冊子なれば、若し是も絶板歟、仏書に『一言芳談』あり、芳を艶に換えたる標題の附け方に、拙作ならざるは思ひやるべし。

種彦は、これによると、巻一〜四の零本を手にしたもので、巻五は未見であったのであろう。が、「宝永年間の印本」と推定し、しかも、本書の巻五の尾に「宝永四丁亥歳」と刊記があるがごとくである。

本書の書名は、序に記すように「風流なる事を独びとりがはなしたるまゝに。書あつめたる草子といへば。さては一言法談のやうなるものな

るべししからば。一言艶談とも。いへかしといはれたるに。吉原の二字」を冠して『吉原一言艶談』と題名したと述べて、仏書の『一言芳談』からのものであることが知れる。

内容は、巻一は「太々神楽」、「思の大豆」「扇流し」。巻二は「月見」、「昔の友」。巻三は「御園」、「ねざめの郭公」。巻四は「古き枕」、「大臣」。巻五は「紅葉狩」、「空だきもの」の十一章からなる吉原に関する雑話集である。しかも、序文で「はなしたるまゝに。書あつめたる草子」と云っているように、「新久が曰」、「丸七が曰」、「川八が曰」、「さる大臣の曰」と聞き書きの形式をとって、吉原に関する風俗習慣を集めている。

これは、我々にとつてその風俗習慣語彙等を知り得る好個の資料ともなっている。一例せば、「たんぜん」について巻三に記す所があるので、それについて先ず二三の辞書の説明を引用してみると、

『日本大辞書』には、

(一)旧幕時代ノ初メ、江戸ニ流行シタ遊治郎ノ風俗。其起原ニ関スル諸説ノ内次ギノガ正シイ。一洞房語園、「往古柳原(江戸、神田)辺ニ何某(松平)丹後守殿トイヘル邸ノ門前ニ名譽ノ風呂屋有リ。其頃少年ノ人人此風呂ニ入りテ衣裳ヲ着換ヘ、ソレヨリ大門通りヲ直ニ吉原へ通フコトナリ。其姿白柄ノ大小ニ白縞子ノ巻キ羽織リヲシケリ。是ヲ中村七三郎トイフ役者狂言ニ取り組ミ、たんぜんト名ツケ、カノ丹後殿ノ門前ヨリ吉原へ通フトイフコトヲ略シテ、たんぜんトイフトイヘリ」(二)芝居デ、俳優ガ踏ムろつぽふ。一洞房語園、「六方ノ事ヲ丹前トイフ」(三)どてらノ異名。

『大日本国語辞典』には、

■たんぜんすがた(丹前姿)の略。■どてらの異称。■たんぜんぶし(丹前節)の略。東海道名所記「比丘尼中略歌をうたふ、頌歌は聞きも分けられず、たんぜんとかやいふ曲節なりとて、ただああああと長たらしく引きずりたるばかりなり」■雪踏の鼻緒の一種。丹前姿したる人の用ひたるもの。色芝居草子「つめ袖に後帯、もみの丹前をはきものにあてがひ」■芝居にて、役者が舞台より花道を経て揚幕に入るとき歩む一種の足の踏み方。六法。■芝居にて、吉原通ひの丹前姿の出ヲまた六法などに用ふる三味線入の合方(カガシ)。津島丹前・あばれ丹前等あり。佐渡島日記「六法といふ風俗は中略江戸さんちや通ひの風俗をして見せけるより起こりけるとなん、江戸にては丹前といひ、大阪にては出端といふ」役者全書下「丹前」

『日本大辞典 言泉』には、

一 たんぜんぶろ(丹前風呂)の略。二 たんぜんすがた(丹前姿)の略。三 芝居にて、俳優の、六法を踏むこと。四 たんぜんぶし(丹前節)の略。(引用例『東海道名所記』は省略。以下同様。筆者注)。五 芝居の囃子(ハヤ)の一。吉原通のもの又は丹前姿したるものの、花道の出入などに用ふる三味線入の合方(カガシ)。六 どてら(襦袍)に同じ。七 雪踏の鼻緒の一種。丹前姿したる者の用ひしもの。『大言海』には、

(一)男達風ノ服装。厚ク綿入レタル広袖ノモノニテ、羽織ノ類ノモノ。常ノ衣服ヨリハ大形ニ、掛襟ハ、男ハ黒八丈、女ハ黒天鷲ヒロオドリ絨、又ハ、黒縞子ナドヲ用ケル。ドテラ。理非鑑(寛文)下「当世ノ若キ人人衣紋ツクロヒ身ヲカザルコト、云云、皆好色ノ為ナラズヤ、云云、たんぜん風トヤラン、勝山風トヤラン云フテ、刀脇差、月代マデモ、古ニチガヒテヤラルト見エタリ」(引用例『守貞漫稿』)。(二)芝居ニ、立髪タテガミノ鬘カウラノ称。(六方組ロクホウグミノ旗本奴、町奴ナド、丹前風呂ニ通フ者、立髪ナド異風ヲナシ、六法ヲ踏ミテ徘徊セシカバ、コレヲ丹前六法風ト呼ビタリ、芝居ニ丹前風トテ学ブト) (三)転ジテ、役者ノ称。写本、洞房語園「多門庄左衛門(初代、明暦万治ノ頃)ト云フ芝居者モ、勝山ガ風ヲマネシ故、丹前ノ名ハ此勝山ヨリ始ル」昔昔物語(享保)丹前の町風呂「此風呂屋へ通フ者ノ風俗ヲ移シタルガ、丹前トテ歌舞伎者ノ異名トナレリ、丹前ニ来ル人ト云フニテ、丹後殿前ト云フ心ナリ、何ニテモ伊達道具ヲ丹前ト云

フ、是ヨリノ事ナルベシ」

『大辞典』には、

一 丹前風の略。二 どてらの異称。(引用例『守貞漫稿』は省略。

以下同様。筆者注)。三 丹前節の略。(引用例『東海道名所記』)。

四 雪踏の鼻緒の一種。丹前姿したる人の常に用ひしもの。(引用例

『色芝居草子』は省略。以下同様。筆者注)。五 江戸歌舞伎特有の

語。丹前振ともいふ。丹前風の扮装をして廊通ひなどをする動作を

取入れた所作事。古く六方とも称し、京阪では振出し・だんじり・出

端等と称した。(引用例『役者全書』は省略。以下同様。筆者注)。

「近世上方語辞典」には、

夜着よりは小さく着物よりは大きいもの。どてら。かいまき。皇都

午睡三下「丹前を、搔卷、どてらとも」(上は上方、下は江戸)(引

用例『守貞漫稿』)

最近の古語小辞典類の『新版 古語辞典』には、

①「丹前風」「丹前姿」の略。②どてらの別称。③雪踏の鼻緒の

一種。丹前姿をした人の用いたもの。④「六方」の一。芝居で丹

前姿をして吉原よし通いなどをする動作を取り入れた所作事しごと——

すがた「一姿」丹前風呂お風呂の湯女なゆ、勝山のふうをまねて起った衣服

の着こなし。遊び人・俠客かきやくなどの間に流行した伊達姿いたてす

『新明解 古語辞典』には、

①歌舞伎で、役者の花道における歩き方。「六方ぼろつ」の一種。②

どてら。③雪踏たせの鼻緒の一種。

『岩波 古語辞典』には、

①「丹前風」の略。「其の名も高き」の名のみ残りてなつかしや」

△評判・濡仏上▽②近世上方で、どてらに数か所、綴糸(じ)を付け

た着物の称。(引用例『守貞漫稿』)③「丹前節」の略。(引用例『東

海道名所記』)④歌舞伎で、丹前風の扮装で廊通いなどの動作をす

る所作事。後期には、江戸の顔見世興行の風流な舞踊の特称となっ

た。「一」[風ノ]出端(じ)△落葉集三▽⑤他の語に冠して、派手で

ぜいたくなの意を表わす語。「一編笠」△仮・よだれかけ六▽——ふ

う「丹前風」近世初期、丹前風呂の湯女勝山に始まった派手でぜい

たくな風俗。一説に、その風呂に通った遊客の風俗に始まるとい

う。丹前姿。丹前流。(引用例『理非鑑』)

近年出版された『日本国語大辞典』には、

①江戸時代、丹前風呂へ通った町奴。また、その風俗や伊達姿(だ

てすがた)をいう。歌謡・松の葉四「丹前清玄」随筆・八十翁疇昔

話「今に何にてもはでなる風を丹前(タンゼン)と云」(引用例『昔

昔物語』)②「たんぜんぶし(丹前節)」の略 (引用例『東海道名所

記』)随筆・守貞漫稿二二「昔は丹前の小唄と云てあり。今も土佐

節の節付に六法とあるはこの小唄の節なり」③雪駄(せった)の鼻緒

の一つ。丹前の姿の人が多く用いたもの。評判記・色道大鏡二「雪

駄の鼻緒には、すり緒・ほそ緒・つぶねぢ・よしはら・二つねぢ・

みつねぢ・丹前(タンゼン)・生かけず・くりかけずなどとして、さま

さま付来りぬれど」④「たんぜんろっぽう(丹前六方)」に同じ。歌

舞伎・御撰勸進帳五立切「丹前の出になり、花道より八重平・八重助、対の伎にて出」（引用例『佐渡島日記』）⑤歌舞伎で、吉原通いの丹前姿の出（で）や丹前六法の際などに用いる。三味線入の合方（あいかた）。⑥防寒着の一種。厚く線を入れた広袖風のもので、衣服の上に着るもの。「丹前姿」から起こるといふ。上方の風俗。また、一九世紀以降上方風俗が江戸に移り、「どてら」をも称するようになった。△季・冬▽雑俳・柳多留七〇「丹前で来ると蔵宿うんざりし」（引用例『守貞漫稿』）。

以上の諸辞書を通覧すると、語釈・用例ともに、一書相伝、かつ孫引の連続であるがごとくのもある。

しかし、『大言海』に仮名草子の『理非鑑』を引用しているのが珍らしい。ところが、(三)の語釈説明に「転ジテ、役者ノ称」と『洞房語園』および『昔昔物語』の用例を引いているのであるが、この二者の用例にあつては、この語釈説明の解釈は通じ難く、かえって同書の語釈説明(二)の「男達風ノ服装云云」の解釈に近いのではあるまいか。そのためであろうか、『大言海』以前、以後においてもこの語釈説明としては見えず、この二者を用例として引きながら他の語釈説明のそれである。

また、『岩波 古語辞典』に、遊女評判記の『ぬれほとけ』、仮名草子の『よたれかけ』を用例としていることは特筆すべきで、近世初期の語釈説明としてはこれが正しいと思われる。けれども、本書『吉原一言艶談』中に次のように、

むかしは大夫格子五寸三寸のきれの女郎百州までうちこんで。女郎

のかず。五六ひやくにすぎずとかや。そのころは風呂屋ものおほく。ことに丹後殿まへにかつ山とて名とりの呂州。髪のゆいぶり小袖のしたまで風流なるとりなり。これより丹前といふ事おこりて。今はかぶき役しやをたんぜんといへり。このふるやもの御法度につき俄に外の世わたりのでだてもならず三谷へうつり。吉原とひとつになり。さんちやとなづけ。現金式角にきはめ。やりてなしにおとこさばき。かつ山におとらぬよねどもあまたありて。おもひのほかはんじやうせしに。

と見え、歌舞伎役者の語釈説明を加え明確に示している。原義的には『岩波 古語辞典』などにある通りだと思われるが、『大言海』に用例としてはやや問題があるけれども、(三)の語釈説明「転ジテ、役者ノ称」の意にも用いられるに至っていることが、広く用例を求め帰納的に作業することによって首肯できる。

このように語彙に関しても吉原のそれをよく伝えた作品でもある。

書 誌

表紙 紺色表紙。

縦一九・〇浬 横一三・五浬

題 籤 後補墨書で

「吉原一言艶談」

冊 数 五卷合一冊

ただし 卷五欠

行数 一面十二行。

匡郭 四周单边

縦一九・二糎 横二三・五糎

内題 「吉原一言艶談」

序題 「序」^{じよ}

柱題 なし

柱刻 上部に(一〜五)と巻数がある。下部に丁附。

丁附 卷一 一〜十三

卷二 初、一〜九

卷三 一〜十二

卷四 一〜十

卷五 一〜十

挿絵 全十八画

卷一 七ウ、十ウ

卷二 一ウ―二オ、四ウ、七オ

卷三 二ウ―三オ、五ウ、八ウ

卷四 二ウ―三オ、五ウ、八ウ

卷五 二ウ―三オ、五ウ、七ウ

刊記 卷五終丁に次のようにある。

宝永四丁亥歳

日本橋川瀬石町

書林山口屋須藤権兵衛

印記 「中川氏蔵」、「帝国図書館蔵」の朱印がある。

備考 他に「待賢堂」、「福田文庫」、「江戸四日市古今珍書僧達摩屋五

一」等の印記を持つ東洋文庫蔵本が現存する。表紙 藍色表

紙、縦二二・四糎 横一六・〇糎。題簽 卷二のみ残存^{京都}「大坂

吉原一言艶談 二」とある。冊数 五卷五冊。以外は国会本と

同じである。が、国会本は卷五を闕く。よって同板である東洋

文庫本によって記した。

凡例

一、底本は国立国会図書館蔵本とペン書きの写本を使用し、東洋文庫本を参考とした。

一、原典に忠実であるを旨とした。よって、私意による句読訓点、あるいは清濁を施すことはしなかった。

一、仮名は総べて現行のものとした。

一、原典の行数は、一切考えなかった。が、丁数に関しては、一丁の表を(一オ)一丁の裏を(一ウ)とした。

一、挿絵は総べてこれを省略した。

一、原典の振仮名は総べて元の儘とした。

一、原典の不明瞭の箇所は、□とし、私に補ったものは「」で囲んだ。

澗明が持参の濁酒には。遠法師もとろさくになり。六時念仏の勤をわすれて。千鳥あし西は谷あひあふなひがてんじやと。虎溪の橋をつゐわたられたためし。いはんや今の世の凡夫。酒色のふたつに。家を亡身をしなふともから失。輩。すくなからず。まして。色里の遊興二揚のすがきには。心魂も飛あがり。かはむきし(一オ)付ざしに。二日酔して。居つゞけの揚銭たまれば。後には家財を分散にし。其身は。紙子一になること疑なし。一たび大門の内へ。足ふみいれし男は。若ひ子共の。風上におくも穢じやと常々いはるゝおやぢ。七つおきして御堂まいりせらるゝ道に。一封の書を拾はれけるが。人見ぬ方に□□□□「よりてカ」。是を開見。かぶりをふり。もとの所にそろ□□□□「りとカ」おきて。あしはやに通られしをあやしく。彼書をとりに(一ウ)見るに。色里の事を書たるもの也。其可笑これを清書して□□□□□□□□「五冊となしカ」。題号を。思ひめぐらす折ふし。旦那寺の和尚に逢。此頃おかしき草子を求めした。名を付て罷下ませひといへば。其書も見ずには如何との挨拶。和尚に見せんもつきなくて。儒仏道の書にもあらず。たゞなにとなく。風流なる事を独びとりがはなしたるまゝに。書あつめたる草子といへば。さては一言法談のやうなるもの(二オ)なるべししからば。一言艶談とも。いへかしといはれたるに。吉原の二字を加へて。これが名とし侍るものならし(二ウ)

大々神楽

初穂の千両箱は土蔵に在り

また名別成色里のさばき

福は揚屋のおく座敷

鬼の大豆

豆板のつもりも様々の世中

扇流

隅田川の広とりさた

竿にさへぎる曲水の盃(三オ)

大々神楽

新久が曰。夫。吾朝の初。陰陽の二神。天のうき橋のうへにして。夫婦交合ありしより此かた。情の道をうけつぎ給ひこの花さくやひめの見ことは。一夜の契に。御腹が段々ふとりしを。男神うたがはしくの給ひしかばこれをうらみ給ひ。一室に入て火をかけ。はらめる子皇子にあらざんば。やけしなんとちかひ給ひし。其誠あらはれて。母子ともにつゝがなかりしとかや。これ心中のはじめなるへし。性悪は。すさのをの尊よりおこりて大神と口説はじまり。天の岩戸にとちこもらせ給ひしを八百万の神たち。神楽を奏して。御心をなだめ給ひしより。神楽といふ事

はじまりたり。しかるにこの比上方(四オ)

挿絵(四ウ—五オ)

の色里にて。大々神楽と名づけ。松。梅。鹿恋。はしの女郎まで三日つづけて惣じまひ。其きた関東迄もかくれなく。さる大臣。吉原にて大々神楽のうちはじめをせんと。大くはんをおこし。末社をあつめて。このことおもひたつよしかたられしに。いづれも悦。日本無双の色里にいまだこのきたなかりしこと。内々無念にそんぜしが。これよき御氣のつかれやう。三日。三夜。のみつづけて。此身は土手のつゆときえ。やきばのけふりと立さるとも。この世のおもひで。これにすぎじ片時もはやくおことはの。かはらぬうちにこれからすぐに二丁立。おせやれさつさ。さつささぶ六十八日くはんをんまいりのにきやかさ。色をつらねし。花のたもとを(五ウ)弓手に見て椎木なともうちすぎぬ。いさむ心の駒形やむかふすま崎ほどもなく。はやよこぼりにて舟より揚り大臣末社もろともに。揚屋にいらせ給へば。内義よろこびまつ大夫様へしらせましやと。いふよりはやく御出やりてのうめが門口から。けうときわらひ。ことよひはおもひかけぬ御出。大夫様は。松葉屋へ久しき御やくそく。ことばりを申ましてと。はやくちにいふ。ときに台所の方より笛。太鼓。つづみのおと。久作亭主のふるばかまをきてかみいれを急ぼしとなし。扇。しやくにもちなながら。かみ座敷のこのうへにあがり。つづみたいこうちきれば。神たくしんたく御神たく。抑大臣。今宵俄この里へ。あまくだらせ給ふ事よの義にあらず。此ころ上方の色里にて。松(六オ)梅。鹿恋。端の女郎に至まで。老人ものこらず。三日つづけて。惣じま

ひ。天のいは戸の神代もきかずおもしろやと大臣。なゝめならずよろこばせたまひ山ぶき色のはなをふらせ給ふ事。あたかもゆふだちのふるがことく。揚や。女郎屋。うけよろこび。まつしやの神はいよ／＼いさみをなし。日比おもひいれのつかみどり。女護島へわたりたるこゝちして三日三夜のつづけのみ。あひのあまりのおほさはぎ。くはんとうまでもかくれなし。しかるに此きとひろしといへどもいまた大々かぐらのなきことを。大臣。むねんに思しめし。けふ末社をあつめ。吉原におゐて。大々神楽のうちぞめをなされんとの。御神たくなり。ていしゆも(六ウ)内義も。よろこひをなし。口切の御神酒を。あけられよ富都もこの時じやに。めをあひて三千人にあまる。女躰を拜しその上のぞみだいにつかみどりをせよと。はては大わらひになりて。のみかくる。時に大臣。まことに久作がいふ通り。吉原にて。大々神楽のうちぞめをせんとおもふなり。ほかからおもひよるまじきものにもあらずせんこされてはむねんなり。こよひの内に。日限をきはめてやくそくせばやと。拍子にのつていはるゝを大夫しばらくしあんがほにて。なるほとよひおもひつきながら。是はらちがあきますまひといへば。大臣。おほきにせかせられ。これほどのことなるまじきものとのみたてさりととはつまらず。あてのなきことがいわるゝものか(七オ)

挿絵(七ウ)

このたひの入用。中勘して。下やしきの土蔵へのけおきたりと。ちと声だかになる。時に大夫すこしもさはがす。もうしおまへがこれほどのことにつかへませうとは。たれかおもひよらず。わしがいふのは。女郎衆

のやくそくが。埒あくまひといふ事じや。おか様。なにとおもはしやる
といわるれば。わしもはじめからさやうにはそんなじますれど。まづお心
まかせに。申つかはして見ませうとて。わかいものにみこませ。まづ三
浦屋へつかはしけるに。中にも年まの女郎にあふて。このことだん／＼
かたりおやく束に。まいりましたといへば。そのやうなふるひことはお
きやれ。高尾どのゝ客衆わかさやにて。此さたありしに。口きく女郎一
人もやくそくせず」(八才)さてはさんちやよりしたをと。日限きはめて
申つかはせしに。伏見丁さかい町の内にて。巷二間やくそくせしとかや
そのほかはらちあかず。其家なじみの客衆わけ有て一日の惣じまひはか
くべつ。三日つゞけてといふことはうめちやさんちやの女郎も。口きく
ほどのものはやくそくせず。かへりておか様に。わしがいひますといや
れと。あいそもなげにいわれて。返事いふまでもなく。あとほさたなし
になりける。あんつうたくさんにもちかけてもおもふやうにまわらぬ
といふは。ひとへにかくべつなる所から。色里のさばきまで。ほかから
まねのならぬ事そかし。大々神楽の望もあらば。すこしの持参金にて上
方へのぼられよといわれしこそおかしかりし(八ウ)

鬼の大豆

古粹の曰。もとは西国の生れ。しるべありて吾妻へくだり。関東にて
材木山をうけあひ。和泉の柚を抱て山入。伐木とう／＼のこゑひゞきわ
たりて山だしせし日より。水しほ心にまかせ。ほどなくふる川のあけ

にちやく木。おりふし材木のきれめ値段よく。大ぶんのかねもうけ。此
いきほひに。色里のさばき見事なること。かたをならぶるものなかり
し。すさまじき物にして。見る人もなき師走の月も。三丁だちの大やか
たに。おきごたつをしかけ。すみだ川の川かぜふせぐ酒のくも成事に
して。やどにめたよりあたゝかに。土手のしもかぜ(九才)身にしむも。
ひいやりとおもしろき機嫌にてあげやへゆけば。けふ年越のまめうつし
たく。大夫ばやくそくなればひるから待うけて。としこしのめでたさ。
まづさけになしてかの大匠。ていしゆをよびいだし。こよひのまめハわ
れにうたせよとて。めしつれし末社にうなづけば。あひといふてはしり
出。間もなくちいさき箱一つきりやうのよひ仲間四人にて。になひきた
るをさしきへいれてふたとれば。まめいたのかず／＼。ひとまひとまに
まきちらせば。福ばうちにとはしり入男女子どもまじりに。ふみあひ
て。なくやら大わらひその中に。大夫がかぶるもありしが。わしがとし
のかずほどひろひましたと。かの銀の中へ。しうぎばかりに入たりし
(九ウ)いりまめを。十粒ほどひろひて見するもあどなく。一階さしき。
台所の角までまきちらして。拾一貫めの銀よほどあまれり。おもひのほ
かいらぬものじやとかたられしを。まきゑしの八といふもの。成ほど其
筈じやといへば。久七きのみじかきおとこにて其方がつるに銀一粒。人
にとらせたこともあるまひのにそのはづじやとおかしひことゝわらへ
ば。いかにもおやの代から銀子を人にたゞとらせたことはなけれど。も。
百 抓にて漸々八九貫めの銀なるべし。朱座のはらひに銀やるとよく
ためしたとぞ

あふきながし(十オ)

挿絵(十ウ)

水無月の土さへさけて照る日には。むさしの堀金の井の清水もぬるく。まして廊の内は地せばく。さんちやの二階ざしき。大かたは五六畳敷にしきりて床とれば小風呂のうちへ入がごとし。あげやはひろしといへども。おく座敷一間二間こそ。庭前のつき山。松におとする風のたよりも。すゞしきこゝちすれ。そのほかのざしきは。大かた三尺のくれゑん。あかりとりより空を見て。手水ばちの龍のくちにて。手足をひやす菜のみいざひるのうち。あつさをわすれんと。一座のかぶる五六人めしつれ大臣末社のこらず。大やかた三ぞうこぎつれて。すみだ川へおしいだすほど。そのすゞしき。伊八といふ。ふとりすぎたるおとこがはだかにて。猶あせを(十一オ)ながせしか挾箱より裕とりいたすなど。いわるの水をむすひあけて。なつなきとしとおもはれしむかしの人を。このふねにのせましたらば。こゝへてしぬるとよまるゝてあらふと大わらひ。おもふよふならば大夫様がたをものせませひで。よしそれとても世の中と菊都が二あかりのうつりもおりからおもしろく。きんりうざんのふもとに舟とめて。細引がひきあけし鯉の吸物。また酒になしてのみかけるに。吉弥と云かぶるが。舟いたに水なぶりして。もちたるあふぎをひらきながら水のうへえとりおとしけるが。かはかせにさそはれて。うきぬしづみぬながれゆくを。おもしろしと。手毎にもちたるあふぎをな

げつくして後(十一ウ)は浅草のあふぎ屋より。ひつながらとりよせ。ひらてき何百本ともなくうかべけるほどに。さしもにひろき隅田川も。よし野たつたの花もみぢ。くれなぬくどる水のごとし。其日出かけし遊山舟。上るり小うたおどりもやめて。このなかに目をくらしぬ。道行者は立留りて。あふきながしといふ事は。小袖かたびらのもよう重箱のまきぎにこそあれ。生の扇子なかしをみることは。これがはじめと。金龍山のふもとより兩國橋三またの末。つくだじま。のちにはうみへながれいで、漁父はあみ引ことをわすれ。いかだ師は竿をすて、其日の興。ただ此あふきながしにかたつきぬ。あけの日さる大夫。逢かたの大臣に。この扇ながしのこと(十二オ)かふるともが見てきてのはなし。かはりたるなぐさみとかたられしに。かの大臣。けふはまたあたらしきおもひつきありとて。盃を干ほどとりよせ。かぶる末社を引つれて。横ほりより大屋形にのり。隅田川の川かみ梅若のあたり。人もみぬかたに舟とめて。かのさかづきをとりいだし。手ごとになてうかべけるほどに。手まづさへぎる曲水の宴もおもひやられときならぬもみぢ散しく心ちして。いかばかりふく峯のあらしぞと。とはまほしきこゝち。そのおもしろさ。川しもの遊山舟。そのほかゆきゝのものまでもおもひかけぬかたよりなけれきたるにきもをけしきのふのあふぎのさた。かけもあらじと。金龍山の(十二ウ)ふもとに家来四五人のこしおき。このやうすを見せけるに。首筋のいたきほどまもりあるに盃もながれこず。光陰とまらねば。夕陽かげかたぶきてかけおきし舟どもは。兩國橋の花火みるとして金龍山の入相のかねにちり／＼になりて。あとにのこるものとして

月見

は。水のうへにむれるてうをくふみやこ鳥きてはかののこしをきし。家来ともばかりなりその日は常州山よりいでしぎいもくのいかたおほくおりふし東風つよく吹て。かのさかづき。にしの方にかたよりてなけれけるを。いかだしともが見つけて。のこらすひろいあげける。こま／＼とりのこせしさかづき五十や七十はながれゆけども。川はどひろくして。人の(十三才)めにかゝるほどのこともなく。たれ見とがむるものもなければ。家来どもかへりて此よしをつげたるに。大臣興をさまして。あげやへもよらず。舟よりすぐにやとへもどられし。あまりに興あらんとする事はけうなきものぞとかりしもおかしく。きのふのあふぎのあたひ。さかづきの十ぶ一なりといひし。さもあらんとなをおかし(十三ウ)(巻一終)

月見

さす盃はおもはくの定紋

ゆかしき物は杉重の内

昔の文

いまの女郎のうためづらし

田夫なるはおやかたのどが

(初オ)(初ウ匡郭のみ)

古粹の云。いまはむかしにかはりて。人の心せちかし。この色へゆけどもむだかねつかふ事なく。きやくをはめし女郎が。はまることおほし。物日をくりあはせて。節句前にはのぞきもせず。文をやれば心得て。なるほどむひやう息才にて毎日将基さしてゐらるゝおやちが。十死一生のしあはせ。看病にひまなく。此文見ることならずと。やうすをよくはつすものおほし。いにしへは紋日のやく束きやくの方からせりあふほとなりし。中にも中秋三五の月見色里のにぎやかさ。おりすぎ重の。山を(一オ)

挿絵(一ウ——二オ)

なし。嶋臺のかさり物。其けん物のぞめきおびたしく。女郎はさかづきのときだしまきゑに。ふかきおもひを三十一字にあらはし。あるひはほつ句もん所をこのみ／＼の物ずき。ふくさものにつゝみ箱入にして客のかたへ。をくりものかず／＼。さるによつてきやくもぎをはるもんびぞかし。其比魚六と云おとこ松葉屋にての月見。昼からの大さはぎ大なる杉重一くみ。六様の御持参としてさしきへいだせば。ふたをとるより秋の野をささみ肴。薄の中にゑちごうさき。そのまゝかけ出すやうにみえしは。水梨子にて心をつくしたるさいくその手ぎはのきれいなる事。いづれもこぞりての見物(二ウ)なを下の重もゆかしくて。ひらくとひとしく。はつといふおとにおどろけば。金銀のはく座中にちりてしばらく

しづまらず。天井にあたりなげしをぬけてとなりざしきへも。時ならぬはなか雪かとふりちらせば。そのけうかぎりなく。まつばや一家のさばぎをやめて。めづらしき趣向とこれぎた。ぢうの内にかなるしかけやありけん。三十年あんじてもいまにがてんせずと。秘事は眉毛のしろきおやぢのかたられし

むかしの文

丸七がいはいく何事もふるき世のみにしたはしき(三オ)いまやうはむげにいやしと三百年さきによし田氏のかゝれたれば。いまさらいふにおよばずながら。吉原の女郎。十年このかたの風義。大にかはれり。いにしへの。たかを。うす雲小むらさきかつ山のうつりゆかしく。歴々さまがたの御酒のおあひてにもうてず。第一なさけふかく。和哥の道にも立入。ことしやみせんはいふにおよばず。さげよきほとにのみこなして。らうさいの一ふしにはいかほとたけきものゝふの。心をもやはらげて粹となし。なに事もさもしからず。それより段々おとるといへども。いまの女郎のやうにはなかりきもつともくぜつのつめひらき。はりのつよきことは(三ウ)京大坂とかくべつにしてよしといへども。きやしやなことはみぢんもなし。百人一首のうためて百ならでなきをおほえず。このほど舟遊山のつるでにさそはれ。さるさんちやの女郎四五人あげて。一日のえいざましに。持参のちやをたつれば。湯をくみかゝるをみて小便にたち。てまとりて。のみしまひたる此にそろりとざしきへ出らるる

は。こひちやの呑やう。しられぬと見えたり。てまへにて茶たつた事はならずとも。ざしきにつらなりて。のむすべしらぬもあまりなる事ぞかしこれをおもふに。近年揚やのわかひもの。あるひはやりて。又はさんちやをつとめしおとこが。もらひ(四オ)

挿絵(四ウ)

金大ぶんしたためて。女郎をかゝへあきだなあれば。さんちやむめちやのみせをだす。女郎のこゝろつたなきとがばかりにてもなし。おやかたの田夫なるゆへなればなり。揚屋女郎もひまにてうちにあらるゝ時は。けんどんやのかよひかぞへて。銀のむなさんようせらるゝもあまたあるよし。すぎしはる上京して。滞留の中。二条通の四五といふものゝかたへ見まへば。おりふし十一屋ふしみやなど。これはく久しぶりにてのおのほりまづ色里のはなしきゝたし。こむらさきはまめでつとめまするか。うすくもがゆかり。なつかしく。そのころゆかせんとて。ちいさきかぶろなりしが(五オ)今は三浦の御の字のよし。七八年も江戸へくだらす。なしみの女郎。しあらせよきはね引にせられ。または三つ川のながれの身となられたるもおほし。これをおもへば。しなぬうちがたのしみ。このたび御滞留のうちは。むかしをいまにしま原へ御どうたう。久しぶりにていろざとの一座。さんや八重梅もおもしろからんと。ていしゆよるこひのあまりに。ひさうのてうほうを。珍客への御ちそうに御めにかけんとして。いにしへの。やちよが文をとこにかけたり。墨つぎもじのうつりよく

きのふも待けふもまちたくいま興(五ウ) ひとつ見え候べく候

さにもあらず

かしこ 千代

あか大なこん様

こせうとの留

手跡しゅせきの気けたかくうつくしきこと。おそれながら光明くわうめい后宮こうきゆうもはだし。小せのこまちもきよつとせられんとおもふほどなり。これにいまをおもひくらぶれば。京きやうの女郎ぢやうらうのふみといへども。とりあげて見らるゝものにあらず。まして吉原よしはらの女郎ぢやうらう百ひやくたび書かくもおなし文言もんごん。むひつもあるやら人だのみせらるゝもあり。さりながら。京きやうはいにしへの。吉野よしの八千代やちよが風義ふうぎのこりて。なには津つのことのはをもきゝおほえて。此こはなといふはむめのことじやとしり(六オ)哥かじやれんがじやときゝわくるもあり。ちやのゆはいかにも心をよせ。さすが都みやこと心こころにくし大坂おさかは似にてにぬものなり。されども吉原よしはらにはましならんといへば。丹三たんざんといふ男おとこ。そのやうに一いくちにもいひやるな此こほと下くだりし状じやうとてとりいたすをみれば

一 筆致ひつし三啓さんけい上じやう候けい弥御やみ無な異い珍ちん重じゆう此こ方かた御ご同どう前ぜん先せん頃ころ中ちゆう庵あん老らう御ごのぼりのおりから茶入ちやにりの木形きがたつかはされきれ共に相あひ届とど曾そう袋ちやくやへ申付候まをす。きれは見事成けんじやうよしほめ申候將まをす又色里またいろさとの御遊興ごゆうきやう不絶ふたせつと庵老御あんらうごものがたりにて御ごうはさ申承候まをすわれらこと夏中なつぢゆうより持病ぢびやうをこりやうく当月廿一とうげつにじゅういち日東寺にとうじへ参詣さんげいそれよりすぐに(六ウ)

挿絵(七オ)

色里いろさとへさそはれこげんしの三七さんじち甚仙しんせんなど一いざその日は雨あめつよからずふりだして。しつほりとよもやまの物がたり。はり立たての楽齋らくさいがはな

小川武彦 二四

しに。吉原よしはら三浦さんぷらのこと浦うら。いもと女郎ぢやうらうのみよし野のがつかはれたのむといふかぶろをもらはれるに。あね女郎ぢやうらうの事ことなれはいなびかたかたくや在あけんつかはしけるがまたわけありてみよしの方かたへもらひかへさねはならぬ首尾しゆびさまくへばぜひなくかへすとて

わか方かたによるとはすれどみよし野のへかへすたのむはかりのちぎりそ(七ウ)

とよまれたるよし惣そうじて此こ女郎ぢやうらう。ものごとやさかたに。花はなほとよぎす月雪つきゆきの詠なめ心こころをとめ。おりにふれては。水仙すいせんのなげ入いれもしほらしきたのしみ。情なまけの道みちもふかく。一いざしめやかに粹すいのすく風ふうとかたられしを。大夫たふまじりにいづれも都みやこはづかしきとかんし申候まをすつれしこと御存ごんじのやしきの御用ごように付来月つら中旬ちゆうぢゆうには其御地そのおんぢへくだり申候まをすとうりうの間ま。こと浦うらにあひたき望御のぞみひるきのあげ屋やにてはやくそくたのみ入い申候まをす恐々おそおそ謹言きんげん 京きやうより

かくのごとく申きたるにより。おとゝひかの地ちへ(八オ)ゆき。しるべのちや屋やにて。こと浦来月つら三十日さんじゅうにちのやくそく。みごとなるさばきをして見せうといへば。浦うら様さまは先月せんげつ末すえによめ入いれなされました。ほかの女郎ぢやうらうさまがたになされませひとのあひさつ。だんくきとどけて。かのおとこのぞみにすこしもたがはず。そのうへにまだよひ所ところのあるをやくそくして。けさのたよりに京きやうへ申まをすつかはせし。吉原よしはらはほかの色里いろさととかく別べつ。女郎ぢやうらうのかずおほければ。いやしきも有ありまたやさしきもあるならん。このほどよ見せけんぶつせしに。新町しんぢゆうの中なかほどうめちやの二階にかいにて小こつどみのおとするを。きやくかと立たち(八ウ)よりてきけばさる女郎ぢやうらう。幸かうはのつ

づみ七八十番たつしやにおぼえて。しかもひやうしきゝまたすみ丁には。くはんぜ流のうたひ二百番そらにおほえて。うたはるゝ女郎もあり。つどつどさがして見たひものじや二丁めすじにはろくろくひのあるもしれぬといひしもおかしかりし(九オ)(卷二終)

御籤

女郎の貧福

心祝に春をまつ宿

さん銭の包がみ誓文たてゝも

寢覚の郭公

戸のたてられぬ人の口(一オ)(一ウ匣郭のみ)

御 圖

川八がいはいく。鳥の跡とて江戸の哥はかりを集めたる草子あり其中に

遊女小ざつま

われなから心やかはるうしと見し

きのふのむかしけふは恋しき

哥がらのよしあしはしらず。女郎の身の上さもあらんとあはれにおもはるゝといへば。和久といふおとこ。其鳥のあとにておもひいだしたりかくれ家集といふさうしに

色ありし花のころこそ人もとへ(二オ)

挿絵(二ウ——三オ)

おひのみやまやふかきかくれ家

とよみし比丘は。いとけなき比はさる御屋敷方にみやつかひせしが。中年のころより。仏道に心ざしふかく。禅法をたうとみけるが。いまはいかゞおもひとりけん。観音の寺内に。法華をどくじゆして。身はいやしきちりにまじはり。心は江戸やあかしの月にうそぶく。かはりものじやと人のかたりければある人よしはらへゆくつゝめでに立よりて
色ありし花のなごりのゆかしさに

たつねてそとふ老のみやまを

と。懐中の延帙に書つけて見せられしにいたゞ(三ウ)ひて見るしなし。いかさまたゞものとは見えす其日は七月十日。四万六千日にむかふえんにちとて。くはんをさんさんけいおほく。ことによしはらのもんにて。けんぶつの人だち。しばし立とまるへきやうもなければ。返哥きくまでもなくかけ出して、それよりすぐにあげやまちにゆけばなかさきやの千寿まちうけて。けふのおいでのおそかりしはどうしたことぞへ。ちとたしなまんせといふもかはゆるしく。かのうたよみしことかたれば。せんじゆこの哥を。再吟して。返哥はとたづねしに。けふの人ごち返哥きくまもたちとまられず。ことにきのふのふみにも。いつよりはやくと(四オ)ありしほどに。まちていらるゝであらふと。こゝろあはたゝしくて。きかすといへば。さあらば及ばずながら。わしが其人にかはりて返哥して見ませうとて

たつねいるかひやなからん花の色は
うつろひはてし老のみやまを

と。よまれし。手跡も見ことなりしとかたれば呉服やの平六。なるほと
せんじゆ様のぎはよくしりました。第一なさけふかく。あひぎやうあり
て心もかしくく。内証のつりあひよく。ごふくやこま物やのはらひも。
書出しやるまかともなく。とうぎにすむことどうもいへませぬ。今はさ

るかたへよめ入(四ウ)なされまして御はんじやう。それにつけても女
郎ほど。内証高下のあるものはござりませぬ。江戸丁のさる女郎。四五
年このかたうりがけの残ぎん二百九十めほどらちのあかぬ女郎。このぼ
んまへにも是非とらねばなりませぬと。にがみかへつていへは。なみだ
をながして。なるほどこなたのはらちちはもつともながら。わしがふし
あはせを。きひてくだんせ。傳馬町のほうしさまは。鯉のさしみがあた
りて。手あしまでむらさき色になつて死なしやる。本丁のくみ様はおや
かたからよびにきて。先月上方へのぼらんした。いたこの源様へむしん
いふてやりましたが。干鯛がうれぬとのあひさつ。あま(五オ)

挿絵(五ウ)

りのことにこの比はやらしやる。ゆふかほのくはんをん様へ。こめつき
の六すけをたのんで。御くじを取にやりました。しかも六十六ばんにあ
たりて書付がきました

愛憎借金難切根

春思二七福二天憐恩

須頼富也逢二歳徳一

貧乏神終左破奔

この書付を。いしやの玄角様に。見せましたかはるはかならずしあはせ

が。よからふといはんした。心いわるに。六すけにもけんどんひとつか
りてくはせました。春はのこらす済ませうといはれます。一くちもく
はれぬけんとなのはなしに。あまりのことにはらをかへてもどり(六
オ)ましたとかたりしもおかし

ねざめの郭公

大慈大悲のせいぐはんあまねき事。いまさらいふにおよばぬながら。
わけてあさくさのくいんせをん。靈験あらたにましますゆへ。参詣のく
んじゆ。元日より大晦日までたゆるまもなしわが朝はいふにおよばず。
人の国にもこれほどにきやかなるれいちやうをいまだきかず。かみな
り門のまへひろこうじのかたはらに。うき世のひまはむすこにゆづり
て。樂隠居。毎日のさんけいに。あさの五つから。ばんのいりあひすき
まで。よこ(六ウ)めつかふてはとをられず。きをつけて見るに。二王
門へさん銭なげたるものを。いちども見ず。然に此にわう門のさんせん
一か年に。小ばん四十兩のうけあひ。よくのふかきよの中。いかにほと
けの事なればとて。そのたつことはせぬはづなりとかたられし。これ
にてさんけいのくんじゆおもいやるべし。尤このくはんおん。靈験あら
たなる尊像なりといへども。いにしへはこれほとにさんけいもなかり
き。すきし明曆年中に元よしはら類焼せしを。三谷へうつされたるよ
り。いよ／＼にぎやかにたり。これをおもふに。仏じんさんけい
も。十人が八九人は。まことの心さしに非ず(七オ)色里のはんじやう

なるも。もと吉原にくらべて。十倍せり。むかしは大夫格子五寸三寸の
きれの女郎百州までうちこんで。女郎のかず。五六ひやくにすぎずとか
や。そのころは風呂屋ものほおく。ことに丹後殿まへにかつ山とて名と
りの呂州。髪かみのゆいぶり小袖こそでのしたてまで風流ふうりゅうなるとりなり。これより
丹前たんぜんといふ事おこりて。今はかぶき役やくしやをたんぜんといへり。このふ
るやもの。御法度ごほつどにつき俄にわかに外の世よわたりのてだてもならず三谷さんやへうつ
り。吉原よしはらとひとつになり。さんちやとなづけ。現金げんきん武角ぶかくにきはめ。やり
てなしにおとこさばき。かつ山におとらぬよねどもあまたありて。おも
ひのほかはんじやう(七ウ)せしに。また近年きんねん格子かき女郎じやうのはやらぬをお
ろして。大ぜいにやりて一人うめちやとなづけて。さんちやなみのつと
め。これより五寸三寸の女郎うめちやさんちやになりて。今はきれの女
郎一人もなく。大夫格子たふかきのほかは。うめちや。さんちや。扱まてはにしがし
ひがしの百州ひやくしゅうのみ。女郎じやうの惣高そうたかは京大坂きやうおさかをひとつにして中ちゆうくゆきと
とかず。大夫たふは三さんうらやにうす雲高尾くもたかお小むらさき。若荷わがやにみつしほ。
山ぐちやにはつ菊きく。すべて五人ごにんならではなきも。分わあることにこそ。ほ
かは色里いろさととかく別べつなる内証ないしやうのさんやう。さんちや女郎じやうにも。口くちきくほと
のは。かぶろふたりにあたらしきこそできせてつかい。もん日ひせつく
(八オ)

挿絵 (八ウ)

はいふにおよはず。よのつねも二三ヶ月ごっげつまへから約束やくそくやうくもらひぶ
んにしてあふほどはやる女郎じやうも在あり。あけやは拾しゅう一軒いっけん。茶ちややは大門おほいのほか
中の丁なかつあげやまち。そのほかうらやく。くはんをんの寺内じないから。田町たまち

のすへ。西たしのかたは大雲寺前たいうんじまへ。これみな色里いろさとのちや屋やにして。何百間なんひやくけんと
いふかす知ちがたし。とかくよしはらは。不案内ふあんないなるめからつものなら
ぬ所ところぞかし。このさとのはんじやうなるも。ひとへに靈験れいげんあらたなるく
はんせをんのたゞせ給ふゆへぞかし。堂内どうないのさん銭箱せんばこ。十日切じゅうじかぎりに封ふうをき
り。金銀米銭きんぎんべせんひとつにして。かますにとりいれ。いくらともなくはこび
いだし。夫々それぞれにとりわけけるに。かのさん銭せんのつゝみがみに何なにやら(九
オ)かき付つけあるを。しはをのして見れば。色里いろさとの女郎じやうのさんせんつゝみ
しかみなり。ひとつく見るに。おかしきもあり。あはれなるもあり。
まづのべがみ五まひ程ほどにかきたるをよみつゞくれば。▲わしがあひます
きやく様な。中の丁なのつたやよりやくそくに。すぎしとしのはつむまの
日ひからあひそめ。そのいとしさ。ほかのきやくにはつとめも身みにしま
ず。四五日よひさきに見せまでおいで。こよひはおさはりと。おとこがあひ
さつ。立たちながら。ちよつとあふてかへると。つたへよとおほせられし
を。折をりふしおもてに。酔狂すいまいやうするものありとて。立たちさはぎしにとりまぎ
れ。わしにはさたもせず。まちわびておかへり。わしはゆめにもしら
ず(九ウ)そのよは五人ごにん一座いざ。初会しよくはひのきやく衆しゆ。八様の事やちやうのじのみなつかし
く。こよひなどは。たよりもあらふ事ことじやがと。うかくおもふてあま
したのに。ゆふべ御ごいで。ありしよの事ことだんく御ごうらみは尤もつともながら。
わしはゆめくしりませぬと。あらゆる神かみかけて。さまく申まをてもいひ
わけもたらず。おりふしかのとりつきせしおとこは宿やどをりにゆきて。た
れをしやうこにせんかたもなく。其そのことつりて。やはんにもどると。
こしのものをおつとり刀がたな。ぜひにおよばず。さしちがへてしぬるまでと

女 心の一すじに。おもひきはめてとびかゝり。かたなを引ぬき。八様をうちと。ふりあげたるてを。ねずの番のおとこがとりまして。かたなをもぎはなすとて(十オ)かのおとこが手にさはりて血がはしれば。一家大きはぎになりしを。八様もさすがお侍なれば。かたなをさやにおさめて。これにはだん／＼やうすありとてはじめからのわけをいはんしたに。おやかたも聞とゞけて。とりまはせし棒をひかせ。わしはおや方のまへ／＼よびつけられ。大胆なるしかた。かさねてあのきやく衆にあふ事かたくむようと。見せさきにてものいふ事ならぬはずになりまして。八さまにあはぬからは。あだなるいのち。つゆほどもおしからずへんしもはやくきえまいらせたきねかひ。もしまだ大慈悲の御あはれみによつて。おやかたの心もやはらぎ。もとのやうにあひますならば。八日だんじきを(十ウ)いたしませうとあり。是をおもふに神無月のしぐれも。日でりどしはふらねど。いつはりのなきは女郎の心中。天性のまことをえてむまるゝ人間。女郎じやとてちがひはなし。うそはきやくからおしゆるぞと。久けいがかことばおもひあたりぬ。また。中杉のかみ二まいに。かなづかひふつゝかに。いろはもじを。ひろい書にしたるをよみつづくれば。おと／＼ひよみせのしまひごろに。やつこ様と申きやくしゆ御出。おなじみの女郎さまはさはりにて。わしはかはりに逢ました。かぶるの時から。なじみは心やすく。さかひ丁の狂言はなし。七三はなに／＼なります傳九郎はあさいなかといふうちに。やつこ様はあひさつもな(十一オ)御酒きげんにて。はやうねいらしやつたものてあらふと。わしもとろ／＼ねふり心になりまして。ねまきの小袖を引よするとて。

とりはづして尻かできました。よもややつこ様はきかしやるまひとおもひながら。おりふしほと／＼ぎすがなきましたを。もうしやつこ様。いまのほと／＼ぎすはきかんしたかとせりおこしましたれば。けふ常州へつかはせし木綿のかん定。三百めよのさうゐ。さきほどからおもひだして。むなざんようがちがふて。へもほと／＼ぎすもみ／＼にいらす。こよひのうちのことはいはねば。損になるとて。そのま／＼おきてゐなんした。そのはづかしさ。このことさたなし。せひもんくされといわんせとて。いは(十一ウ)せました。されどもこのきやくしゆ。くちのさがなき人様にて。いかにしてもきづかひにおもはれます。やつこ様の此ことをすつきりわすれて。人はいはんせぬやうに。なされてくだされませひ。この願じやうしゆしましたならば。わしがたんとすきます。ところてんを一だいくゑますまひ かしこ

身 ヨリ

あさくさ

くはんおん様留

よみつゞくるもおかしく。まことにはづかしかりけんとおもへば。其心入もあはれなり。いかにれいげんあらたなればとて。あらぬ事までのるといふも。女郎の身ほどかなしきものはなし。そのほか。しんぞう(十一オ)のやく束せしきやく衆が。おやごのくだうをうけてらちがあきませぬ。または。ふかくあひましたきやくしゆが。すこしのことをいひつりて。つらあてに。むかひの女郎にあひます。きやくははらのたつま／＼のこと／＼おもへど。あさゆふめを見あはする女郎が。こちの

客としりながら。あひます。口ぜつしてのくやうにたのみますなど。女郎の心にはやり手にものいふより。くはんをんさまへくはんかけるは心やすくおほえられしもおかしきとぞ(十二ウ)(巻三終)

よるの物のかけながし

古き枕

一角のかはりに

つなき銭もとらぬか損

六百の箱

大じん

惣じまひ

うどんやの(一オ)

右き枕

さる大臣の云おりくは讚茶の二階さしきをとりはらひ。末社ひきつれて。おほ一ざのさはぎもおもしろく。あるほどの女郎。ひろひあげてから。高のしれたるなぐさみ。其内にもめにつく女郎あれば。まくらからはすもありしに。ねだうぐもたぬ女郎は。かしよぎのうそよごれたるに。ふとんもあかづき。くくりまくらは伽羅の油にしみ。にとくするも気味あしく。いつとても。あたらしき。夜ぎふとん。まくらまであらためて。ちや屋へあづけおき。さやうなるおりに。ちや屋よりとりよ

せ(二オ)

挿絵(二ウ——三オ)

すぐにあいかたの女郎にとらせける事。あまたたびなり。この事をさるせちがしこき女郎。きよおよびて。手まへのねだうくの。あたらしきを。もちながらかくしをき。わざとかし道具のふるきを見せかけたるも。つらにて。ちや屋より。例のね道具とりよせて。おき別さまに。よくたませ。ちや屋へ持かへさせしに。かの女郎。すりに巾着きられたるかほつきにて。さらばへといふおさだまりのことばさへなく。うらめしさうに見おくれしも一興なりとかたられしに。村といふ男。ねだうぐのふるきにておもひ出したり。これほと二丁め筋のさんちやに。おかしき事ありし。田舎さふらひ衆と(三ウ)見えて。三四人。女郎見たててあがり。さけそこそこのみて。見物に出られしが。いつれもこしのものはさえず。其中に。この里はじめてと見ゆるおさふらひ。ぎうに。さきほどの大小わたせといはれけるに。見物においでならば大小は御むようになされませひ。おつれさまがたままるごしにて。御いてといへば。人にはかまはず。みどもはおやの代から。こしのものさえずに外出したることなし。しかしながらつとめのかねとらぬうちじやによつて。ぎづかひするそうな。かへるまでのかはりにとて。一角ぎうにわたせば。これにはおよびませぬと。しぶく(四オ)たちて。大小わたしけるもおかしく。郭中をけんぶつしてもとられしに。ぎうもやぼと心えて。だんなはかたひおさふらひじやといたよかせて。こしのものうけとりける。まちかけて。やしよくいだしぜんとれば女郎はしたへお

り。ぎうはとことりて。みよし様のおとこはこゝもなか様のはそこ。あかし様のはむかひとおしえ。つとめのかねうけとりて。おやすみなされませひとてたちてゆけば。おのゝとこへいりけるに。つれのあひかたはざしきもち。とこのかけものしほらしく。ねだうくもあたらしきふたつぶとん三つぶとん。どんすの長まくら(四ウ)ひやうぶも六おりにてたばこぼん。きせるまでみがきたて。かぶろがすいつけてのまするなどいつれもくよしくと。あいもんのことばにてうなづきけるに。かのやぼてんがあいかたはしんぞうなれば。ざしきもかたすみにて。かしのふるきに。むらさきやらくろちややら。みわけのなきほどあかづきたるふとんひとつ。やぶれたる二おりびやうぶをまくらもにたて。たばこぼんはほこりだらけ。これに見くらべて。かのさふらひことのほかふくりうしてぎうをせはしくよびいだし。そちはそれがしをば。ともの者じやおもふか。おなじきんすを(五オ)

挿絵(五ウ)

たしながら。このねだうくの見ぐるしき。ほかのどこに見あはすれば。とのさまとくつばこもちほとのがひめあり。いかにしてもふみつけなるとしかた。かんにんなならず。さきほどの一分をもどせ。身どもはかへるとわめけば。ぎうも心えて。いかにもさやうにおほしめすは御もつとも。さりながら。いづれも様のおあひかたはざしきもち。ねだうくもおてまへのにてあたらしく。おまへ様のおあひかたは。おとしわかにておざしきもなく。ねだうくもおやかたからかしどうくにて。ことにこよひはおきやく様がたおふく。だんくことりて。もはやほか(六オ)に

はござりませぬ。御かんにんなされて。おやすみなされませひ。しかしながら、まくらはかへてあげませうとて。くまりまくらのふるきにかへてわひことすれば。つれもきくかねてなるほどしんぞうはそのはづのことじや。ふそくせねばならぬわけと。やうくになだめける。おなじかねをだしなから。大きなるそんなりと。はらたちそうにおびとひて。いまだ女郎も見えぬさきに。よこたをしにねられたるそのおかしさ。一家の大わらひなりしとかたりしに。太この庄七。れるのしはかれ声にていつぞや。江戸丁のうめちやへ。かはつた(六ウ)おきやくがとれましたたしかにうけ湯やのたるひろひが。このころでだいぶんになりあかりたると見えて。つむきじまのあはせに。きんひらをりのはをり。たまごいろのふくろたび郭中を四五度ほど見めぐり。やうくめきききはめて。女郎の名をとひ。御隙ならばあそびませよとて。二かいへあかれば、さかつきいだして初会はさけもそこくにおさめとことりておつとめをといへば。あひとひて一角わたしけるに。その比元のじのつかひはじめ。やりてはよくも見しらず。子どもをよびて。見(七オ)せにつかはしけるに。これは見にくうござりますとかへせば。なるほどぎんみしたかねじやがといふてたつを。いつかたへおいてといへば。ちよつとそこへいてきまするとて。二かいからおりておもてへいづるを。こしものあれば。よもやくるにけにはせじと。いふほどもなく立かへりて。二かいへあがりさまに。ねずのばんのおとこをよび。ぼんをまいかしてたもとて。両のたもとより。つなぎ銭をとりいだし。やりてしゆにあひませう。此せに一千はん二百十二文。さうばちがひませぬかとてわたしけ

る。金子たくさんなる里にも。一角のかけがへのなきもあればある（七ウ）世そ

大臣

ふとの吉左がいはいはく。われよしはらへかよひそめしは。まだ。十六のすままへがみ。町内のより合にあさくさなみ木のちや屋へゆき。おもひおもひのなぐさみ。暮うち。将基さすもあれば。半太夫土佐ぶしかたるもあり。いざよしはらのけんぶつと。地ぬしどのゝむすこにさそはれ。二丁めにてさんちや女良をかふてもらひ。是よりあくしやうのでき心。おやのほそもとでを。まいにちすこしづゝぬすみため。一かくになれは（八オ）

挿絵（八ウ）

かけだして。このとし月かよへど。あひかたの女郎に。こそでひとつはおもひもよらず。のべかみ一そくつゐにつかはしたることなし。世間のきやくを見あはするに。年中のものびせつくはいふにおよばず。ねどくのほかへ。ざしきのふしん。たゝみのおもてがへ。そのほかないしやうの付とどけ。やりておとこ。ちや屋ふなやどへ。うれしがるものをとらせて。さんちや女郎一ヶ年に入用銀十五くはんめにては。おもふやうならずぼん正月。やりてに二朱ひとつとらするよりほかに。はながみ一まい見せもせぬ客もあり。これをおもへば。おなじうり物ながら。女郎（九オ）ほどそんとくのあるものはなし。われ一生のおもひでに。金

子いらずに大臣のなをとることを。いろ／＼しあんするに。吉原の大もんより内に。けんどんや五間あり。およそ一間に。けんどんのはこは九十。百二ひやくあるべし。きんす五りやうがけんどんは。六ひやくなり。そのはこ。すぐにかへすものにあらず。そのよのうちはほかへうることならず。くるはうちせばく。ことにさんちやは。てまへじまひ。きやくのもてなしに。だい所はとりちらしたる中へ六百のけんどん箱おきどころなく。後にはていしゆないぎも。かたすみにおしつけられ（九ウ）料理人は。ほうてうもちながら。せどぐちにたつてあるよりほかのことなし。ほかからとりにゆけば。こよひは二丁めのなにやより。あつらへありてつかはすよし。けんどん一つもなりませぬと五間ながら。くちをそろへて。のあいさつ。其夜はよしはら中これきたになりて。いかなる。太政大臣さまぞやといわれ。あくる日は。江戸中のとりきたになる事なれども。つゐに。金子一兩とたまるまもなく。ことし四十二のやくどし。伊勢さんぐうも講錢にて。やう／＼なる事なれば。一生の内。此のぞみかなはじと。なげかしき。せめて逢かたの女郎に。はらいつはひ。けんどんくはせて（十オ）しにましたひとねがひしきては女郎もけんどんをたんとくう物にこそとおかしかりし（十ウ）（巻四終）

紅葉狩

女中は屋かた風 くるにけの

つゐでに のみこんだ鱒

びんぼう樽のおみき わらで

そら蕉

たはねた おとこにも恋(一オ)

もみぢ狩

久齋がいはく。このほどさる人にさそはれてうへ野谷中の紅葉狩。くれなゐふかきかほばせに。むらさきぼうしのうつりよく。きんいりしゆすのはとびろ。うしろむすひのはしながくしやんとしたるとりなりの。屋かたふうもすてられず。白ちりめんに水がの子。しろしゆすにすみゑ。あしにがんを名あるゑしにかゝせあるひは。すみるちやに白ぢらしちやしゆすをうらがへして中幅帯。いたりすぎたるものすぎもすたりて。くろじゆすのはとびろに(二オ)

挿絵(二ウ——三オ)

さま／＼のぬいするなんど。地女の風義さへ。五年すくればふるくさく。これみな天下泰平のときに生れて。栄耀のあまりありがたく。かみのゆいぶりも。うへつかたは。もちろん。した／＼町人のむすめまで。かうがいわけ。ふりそでは。しま田。かたわけも。としまは。すで見えしが。今はしらがまじりのばとさままで。ねぢわけにゆはるれど。さのみめにもた／＼ず。身せばかくそでもすたりて。そでなり丸く。けしぐくりもいやになりて。ふくりんなしくよりめあらく。四五年のうちには。りきう時代のそぎ袖。今織のきんいり。中はとおひにたちかへるこ

と。てがたとつ(三ウ)たよしかたひとくいへば。其ざにありける。小道具やの泉といふおとこ。おいとまとて。用ありけにたつを。いづれもあやしく。その方かたちやう。なにとやらがてんせず。心入りかぬうちはいなさぬと。袖をとらへてせめければ。なにをかくしませうぞ。はやくやどへもどりて。人のきのつかぬうちに。女どもがそでしたをきらせて。つばふくろにするかてんと。そのみちにかしこすぎたるもつらく。いざもみちみに。つれだ／＼と。むりにさそひて。すみだ川のわたり舟にのれば。なりひらのとをきむかしもおもひやられ。南は両ごくばし。北はきんりう山。むめ(四オ)わか。かはらやくけふりもあはれに。うらみなはてそあきのよの月と詠し。しほがまのてうぼうも。これほどにはあらじと。竹翁かよしなき。ながものかたりに。舟はむかひのきしにつきて。たけ丁にあがれば。けふ聖天のまつりとして。ふえ太このおと。やたいの牛ぐるま引つとけて。道もさりあへぬ人だち。ぜひなくするべのかたに。たちよりて。しばらく見物するに。らくはうの山入唐人らい朝のまね。めにたつほどのことひとつもなきに。二間に三間ほどなるおほ屋たい夕陽にかゝやきて。ひかりわたる事。山王かんだのまつりにも。これほどけつかうなることなし(四ウ)

挿絵(五オ)

きんいりのもやうさま／＼なるを。こけらいたのはとにたちきり。あつふきのこけらやね。二間三間といへどもよほどのいりめ。いつれの丁よりいだしぞと。たづぬるに。このきんじよ。さるあき人宿願のことありてといふに。なをいぶかしく。ひとりしていだしとは。いよ／＼こ

ころへずといへば。このやたいおぼしめしのほか。物のいらぬわけあり。かのあき人。よしはらの女郎へ。こまものうりなり。このたびしゆくぐはんのことありて。まつりをいただきます。女郎さまがたたばこいれをひとつづつ。かしてくだされませひとたのみけるに。いかやうなる女郎も。いやとは(五ウ)いはれず三つよつふたつ。くちきく女郎は五つもとをもつかはしけるほどに。さんちや十けんほどの女郎より。やねふきあまるほどあつまりたりし。やたいにのりたるおどりこのいしやうのみよきも。かぶろのこそで帯までかりてとかたるに。かのつはぶくろにきをつけしおとも。我をおりて手をうちける。祭すぎぬれば。はやあきのひのならひとて。ほどなふくれかゝり。もみぢもよるのにしきとなりぬ。おみきの小さかづきも。かずかさなればいづれもよききげんになりて。これからすぐによみせけんぶつと。大門ぐちにさしかゝれば(六オ)ちやうちんともしつれて。人おほくたちさはぐを。いかなることぞとたつぬれば。くるにげするものありて。おくりいだすよし。くるにけといふは。まづこしの物もさゝず。近所ちやうにんのでだひ。またはきびしきおやにかゝりむすこのやうに見せかけて。一角などにことかくふりはみぢんもせず。大やうにさばき。さんちやあるひははしの女郎を見たてゝあがり。やしよくすぐるとそのまゝひまをみあはせて。かけだしてにくるたくみ。ふしゆびなれば。大かたとらへられて。このものくるにげするぬす人と。くるわちうを。引わたしつら見しらせて。土手のうへ(六ウ)より下水へふみおとし。どろまぶせにせられほうくのてい。いのちをひろひものにして。かへる。おなしぬすみながら。やしよ

くくふてさけのむはかりには。あやうき事とおもへど。日ほんごくのあつまる所なれば。おりくにあるよし。せめてなますのもりにげならばと。ちや屋にこしかけて大わらひすれば。またといふおとこが。そばにゐられた二丁めすじの。さんちや女郎のまへに。手をつゐて。律義なるかほつきにて。おまへにすこし。とひましたい事が。ござります一義をなますとは。いかなるゆへに申ますぞといへば。かの女郎。わしもよふはしりません(七オ)

挿絵(七ウ)

が。おびとひたのをすみといひますによつて。帯ひもゝといてから。すにて。身を。あはするといふことじやと。さる人のいはんしたとこたへられしにかのおとこ。のみこんだかほつきにて。成ほどきこえました。なればうしろからやかなのが。せごしじやと。うなづきながらいひしこそおかしかりしか

空だきもの

鶏はちよつと見るよりこきりめに。そのかたちも。むめになく。とりによくにて。あいらしく。されどもやまとうたのたねにならず(八オ)蛙はたがめにも。ぶきように見ゆれど。これもさすがにあはれなりなど。代々の人のことのはにもあまたよまれたり。おしたて大夫にもなるべき女郎が。さんちや見せにしやみせんかゝへてゐるゝもあり。またはし女郎にも。さんちや。うめちやに。おとらぬ女郎ありといへども。

その果つたなふして。よき人の手にふるゝことなければ。玉のこしにもえんなくてはのられず。年あけて水くみの久三がさいになりて。たうふのからを。手つからかにゆかるゝは。さだまりたるいんぐわ。これみな。いきとしいけるものがれさることそかし。やりもちの（八ウ）関平がはなしに。ぎのふきう金のながしをうけ取。しちにおきし。こんのあはせをうけだし。もどりにびんほうたるのくちきり。うちかみへおみきをあげて。おろしをいたゝひて。よいきげん。ひま日を幸に。色さとのなじみもゆかしく。よこめふらずに江戸丁がしへかゝり。つとめのほかに百もん見しらせけるに。八まん。よねめがしなし。いつよりもしめやかに。まなくすひつけたほこ。くみちやはぬるふはないかと。きをつけ。かいがらの中より。ねりやくのやうなるものをとりいだし。火とりにくべて。つぼねをかほらせけふとゝのえた。薰じや。なんとよふは（九オ）ござんせぬかと。かたしけなきおことはに。こゝろたまも

うかれ。あたごぞ国もとの。はゝが事もわすれて。しちやよりうけだせし。あはせをとほするまでと思ひきり。けふ一日のたのしみのちのせんだくと。きんちやくのそこをたゝき一角わたせば。二かいへあげてそばにこづけめしのちそう。ちやわんざけのみしだい。おさへた。へさへた。つつかゝつたと。一しやうのおもひでするおりから。見せて大ぜいたかわらひ。いかなる事ぞとたづねけるに。いなかのうつすけかみはわらにてたばねたるが。つぼねの。のふれんをあげて。もうし女郎さま。わしは（九ウ）さつてといふ所のものてござる。おゑどへまいりてかへります。ともだちどもが。けいせいぐるひをして。もとれとおしへ

ました。ぜにもこゝにござると。百もん見せければ。かの女郎わらひながら。そこにをゐてあがらんせといへば。かたしけなふござりますとて。あがるを見るに。土つけるあかぶりあし。これはあまりじや。そこな井のもとにて。あしをあらはんせといはれて。井のもとへゆき。あしあらひてたちかへり。もとのつぼねをわすれるにや。四五問となりのつぼねへゆき。さつてのものでござる。あしあらふてまいりましたといへば。内より（十オ）なにいはんす。こちのことかといはれて。又となりののふれんあげて。さつてのものでござるあしあらふてまいりましたと。江戸丁がしを。昼の九からばんのなゝつまでめいゝにまはりしこそ。おかしかりし。

宝永四丁亥歳

日本橋川瀬石町

山口屋

書林 須藤権兵衛（十ウ）

（巻五終）

付記 この稿をなすにあたり、国立国会図書館、東洋文庫にお世話になりました。

記して深謝致します。